

「日本語再建私説」 解題

長田 俊樹

父が亡くなってから早1年3ヶ月がたとうとしている。

一周忌を機に「長田夏樹先生を偲ぶ会」が1月8日に盛大に開催され、多くの方々が集まってくださった。また、その会にあわせて、『長田夏樹先生追悼集』を出版することができた。これも皆様のあたたかいご支援があつて実現したことで、まずこの場を借りて、御礼申し上げるしだいである。

この追悼集は『長田夏樹論述集』に収められていない、すべての著述物を収める方針で、青山学院大学の遠藤光暁さんや神戸市外国語大学の竹越孝さんが中心になって編集が進められた。われわれ家族、とくに姉は父の書いたものをいろいろと探し当て、父のハンスト宣言など研究とは直接関わらないものまで追悼集に収めることができた。ひとえに父の収集癖のなせる技で、われわれ家族はここまですべて保存してあるとは思ってもいなかった。また、そうした今にも破れそうなものを本にするのは今のテクノロジーをしても大変だったことは容易に想像できる。その仕事を一手に引き受けてくださったのは好文出版の尾方社長だ。本当に想像以上のできばえに家族一同感謝するばかりである。

皆さんのおかげで、父の文章すべてを収めることができた。そう思っているのも、また新しい資料が出てくるものである。全体像を押さえているわけではないので、新資料が発見されても、それは致し方ない。こうしてみつかったのが東京府立第二中学校学友会の雑誌（奥付によると昭和14年3月1日発行）『武蔵野』50号に書いた論文だ。年譜によると、父は昭和14年3月に東京府立第二中学校を卒業し、この4月から東京外国語学校蒙古語部に入学している。いわば卒業文集として執筆したものが発見されたのである。

タイトルは「日本語再建私説」である。父は掛詞（というと高級めくが要はダジャレ）が大好きだったが、この再建には、言語学用語の **reconstruction** と文字通りおかしくなった日本語を再建したいという二つの思いが込められているのだろう。文章全体に、父特有のユーモアが敷きつめられていて、旧仮名遣いの難しさや英語の読み替えを漢語でやることのばかばかしさがよく表現できている。後年、やたら長ったらしく、よく意味がわからない文章が多かったのに比べると、文章も短く平易で読みやすい。

この論文ですでに日本語への起源に対する関心が深かったことがうかがわれる。「漢音漢字の影響を受けない前の日本語」の例をあげているが、驚くことにここに朝鮮語が出てくる。十代にしてすでに、のちの日朝比較言語学の素地が

あったことがわかる。湘南中学時代に、柳田国男の弟松岡静雄門下生の加賀屋平三郎先生から多大な影響を受けた。そう父が言っていたが、柳田が仏教以前の日本固有信仰にこだわったことを思うと、漢音漢語以前の日本語へのこだわりもその影響かもしれない。

このたびこの処女論文（これ以前の論文が見つかる可能性も否定できないが）が愛知県立大学の吉池孝一先生のご厚意で再び日の目を見ることになったのは、家族として、同じ言語学の後輩として、喜ばしい限りである。